

第三三詔—第三三詔

七八〇

其の一

其の一に曰く、大樹をして大小名を率ゐて上洛し、國家を治め夷戎を攘はむことを  
議し、上は祖神の宸怒を慰め、下は義臣の歸嚮に従ひて、萬民和育の基を啓き、天下  
をして泰山の安に比せしめむと欲す。

其の二

其の二に曰く、豐太閤の故典に依りて、沿海の大藩五國をして、五大老と稱せしめ、  
國政を咨決し、夷戎を防禦するの所置を爲さしむれば、則ち環海の武備は、堅固確然  
として、必ずや攘夷の功有らむ。

其の三

其の三に曰く、一橋刑部卿をして大樹を援け、越前前中將をして大老職に任じ  
て、幕府内外の政を輔佐せしむれば、當に左袞の辱を受けざるべし。此れ萬人の  
望にして、恐らくは違はざらむ。

三事中一を  
行はしむ

朕が意、此の三事に決す。是を以て使を關東に下す。蓋し幕府をして三事中の一を選  
びて以て行はしめむと欲するなり。是を以て周く群臣に詢る。群臣忌憚する所無く、  
各心丹を啓沃して、宜しく讜言を奏すべし。〔孝明天皇紀〕

第三三詔

時局を御軫念御述懷の勅書(文久二年五月十一日)

夷狄の患

夫聖人ニ非ルヨリ、内安ケレバ必外ノ患有リト。方今天下二百有餘年、至平二慣  
レ、内遊惰ニ流レ、外武備ヲ忘レ、甲冑朽廢シ、干戈腐鏽ス。卒然トシテ夷狄之患

幕府の因循

神州陸沈せ

列藩内密上  
言す

一身を以て  
天下に易へ  
んや

弘安の先蹤  
を繼がん  
幕府條約を

起テ、不レ能レ應レ之。終ニ癸丑(嘉永六年)甲寅(安政元年)ノ年ヨリ、有司益

駕御之術ヲ失シ、事模稜多シ。是ヲ以、戎虜不レ知所ニ恐懼、求徴無レ屢、條約ヲ定  
メ、關市ヲ通ゼン事ヲ請フ。幕府因循、不レ能レ拒ニ其請、以ニ旗下小吏一奏聽。朕、

知ニ其誣罔一斥レ之。翌巳年(午の御誤か、安政五年)二月、幕府以ニ老吏堀田備中守及  
二二三小吏一登京、事情ヲ陳シ、切請不レ止。朕熟案、古今夷狄之憂雖不レ少、

近年之如ク甚ハ未レ有レ之也。若一旦親ニ狎之、醴流穢漲、神州陸沈シ、朕ガ世ニ  
至テ、初テ金甌ヲ缺バ、何以先皇在天之靈ニ謝セント、深謀遠慮シ、群臣ニ咨詢ス  
ルニ、皆其不可ナル事ヲ白ス。又列藩内密上言之者不レ少。乃幕府二命ジ、天下ノ

大小名ニ令シ、務テ時宜ヲ陳セシム。然ルニ幕府、命ヲ抗シ、肯テ之ヲ天下ニ傳示セ  
ズ。朕、深憂慮シ、未ダ處置スルコト不レ有。於是群臣八十八人、奮然トシテ、奏狀  
ヲ以テ、朕ガ意ヲ贊ス。又或曰、朕、若幕府之請ニ不レ從バ、必承久・元弘ノ事

ヲ爲ント。然レドモ、朕何ゾ一身ノコトヲ以テ、祖宗ノ天下ニ易ンヤト、卒ニ重テ命  
ズルニ前令ヲ以シ、次デ幕吏ヲ返ラシム。又使ヲ發シ、幣ヲ三社ニ奉ジ、戎虜國體ヲ  
汚スコトナク、人民其生ヲ安センコトヲ祈請ス。庶幾ハ弘安ノ先蹤ヲ繼ント。豈圖

ランヤ、旬日之間、幕吏、朕命ヲ不用、遂ニ條約ヲ定メ、通商ヲ許シ、片紙ヲ以テ奏曰、



正義の士を  
排斥す

勤王の志

天下一心  
戮力

神州の正氣

一橋刑部卿

時勢切迫、不得止事也ト。朕、殊ニ其侮慢非禮ヲ怒ト雖モ、未遽ニ是ヲ讓責セズ。三家家門、或ハ大老ヲ召シ、其子細ヲ尋糾セントス。然ルニ尾水越、其餘二三ノ名藩臣ヲ籠居セシメテ、又嘗テ命ヲ奉ゼズ。次デ前將軍薨ゼリ。又忠言スルモノ有リ。曰、嗣子幼若、將軍ニ任ズルコトナク、暫其爲ス所ヲ見テ、而後任之ヨト。然レモ直ニ其職ニ任ジ、其ヲ以テ、其職ヲ盡サシメントス。然ルニ將軍幼若、有司柔情、朕ガ意ニ稱フ事ヲ不知。嘗テ攘夷ノ念ナク、却テ之ヲ親昵シ、剩ヘ正議之士ヲ排斥ス。朕、其三家三卿等ヲ召セドモ、不來。剩ヘ正議之名藩臣ヲ退隱或ハ禁錮セシメ、其積鬱之餘、激シテ變ヲ生ジ、外夷其虛ニ乗ゼンコトヲ過慮シ、特命ヲ幕府水府ニ下シ、天下ノ大小名、同心合力、幕府ヲ輔佐シ、内奸吏ヲ除キ、諸藩勤王ノ志ヲ慰シ、外貽虜ヲ攘ヒ、各國窺視ノ念ヲ絶セシメントス。然ルニ皆、朕ガ意ヲ體シ、其命ヲ海内ニ示傳シ、天下一心戮力、徳川ヲ輔佐シ、外夷征殄ノ議ヲ不興、却テ公武不和ノ難ヲ醸シ、朕、深ク之ヲ憂フ。其間事紛紛、盡ク言フベキ事難シ。然レドモ其一ニ言フニ、人人以爲ラク、幕府如此衰弱不振、戎狄如此猖獗不懲。然則外患何時止マン。神州正氣何時回復セン。人民何時生ヲ安ゼン。是豪傑英雄ノ將ニアラズンバ、治ムルコト不能ト。三家三卿ノ中、一橋刑部卿ハ其

勤王の士を  
縛收す

櫻田門の變

英雄ナルヲ以テ、之ヲシテ其職ニ當ラシメバ、寧ヨク大事ヲ成就セント。是以草莽有志ノ士、其事ニ周旋奔馳スルモノアリ。又其間、奸猾其意ヲ快クセントスルモノアリテ、事多ク朕ガ意ノ如クナラズ。不日ニシテ、間部下總守登京、幕命ヲ以テ、凡テ天下ノ事ヲ論ズル者、一切ニ縛收シテ、之ヲ江戸ニ下シ、次デ四大臣落飾幽居シ、正議ノ士、是ニ於テ盡ク。下總守幕議ヲ白シテ曰、條約押印ノコトハ、先役備中守ノ所爲ニシテ、當役ノ知ル所ニ非ズ。即今條約ヲ返シ、通市ヲ止ムル時ハ、外國ニ不信ヲ傳ヘ、彼ガ怒ヲ激シ、異變不測ニ生ゼン。環海武備未ダ充實セズ、且大奸内ニ在リ。若外患起ラバ、内憂之ニ乗ゼン。然ラバ忽チ天下土崩瓦解、如何トモ爲ベカラザルニ至ルベシ。希ハ幕府ノ申ス所ニ從ヒ、姑ク天下ノ時勢ヲ覽ゼンコトヲ。必不レ經年シテ、戎虜ヲ掃絶シ、神州ノ正氣ヲ回復セント。是以、朕、不得止事一、枉テ其請ニ任セ、以テ天下ノ時勢ヲ見ル。其後庚申年（萬延元年）三月二日、水府浪士、井伊掃部頭ヲ刺ノ事アリ。其所爲ハ亂暴ニ似タリト雖モ、其所懷中ノ狀書ヲ視テ、其意ヲ察スレバ、深ク外夷ノ跋扈ヲ憤怒シ、幕府ノ失職ヲ死ヲ以テ諫ムルニアリ。是朕ガ當テヨリ所憂也。又其後年墨使ヲ刺シ、又東漸寺ノ事件、皆其意斯ニ基ヅケリ。其餘外夷ノ陸梁ナル、對州ノ事、二個國相増事、兵庫ヨリ陸行、江府ニ至ノ



浪華開商延  
期の術策

降嫁の事、  
朕が意に忍  
びず

天下には代  
へ難し

勇豪の士也

愛むべきの  
士也

事、海岸測量、殿山ヲ借與ノ事等、朕、一一幕府ニ、其然ラザル事ヲ責レドモ、幕吏奏曰、是皆一時ノ權宜ニシテ、浪華開商延期ノ術策ナリト。又奏請曰、外夷ヲ掃殄スルニ、天下一心戮力ニアラズンバ、爲シ難シ。故ニ和宮ヲ以テ將軍ニ尙シ、公武一和ヲ天下ニ表シ、而後戎虜勦絶ニ可レ及也。不然バ、公武ノ間ヲ隔絶セントスルノ奸賊アリテ、外夷拒絶ニ及ビ難シト。朕念フニ、先帝遺腹ノ妹ヲ以テ、百有餘里ノ外ニ嫁シ、而モ古來未曾有之武臣ニ尙センコト、朕ガ意實ニ忍ビザル所也。然ルニ幕吏切ニ内外ノ事情ヲ陳謝シ、朕ガ憐ヲ請テ不レ止。朕モ意ニ忍ト雖モ、祖宗ノ天下ノ事ニハ代ヘ難シト、意ヲ決シテ其請ヲ許シ、十年ヲ不レ出、必然外夷掃除ノ事ヲ命ジ、且海内大小名ニ朕意ヲ傳示シ、武備充實セシメントス。幕吏連署奏狀シ、皆朕ガ命ヲ聽ク。故ニ去冬、和宮入城ノ事ニ及ベリ。然ルニ今春ニ至リ、幕吏安藤對馬守、浪士ノ爲ニ刺サル。是等皆、掃部頭ヲ刺セシ者ト同意ノ者ニシテ、如此輩ハ、死ヲ視ルコト歸スルガ如ク、實ニ勇豪ノ士也。嗚呼、此輩ヲシテ、少ク其憤鬱スル所ヲ押ヘシメテ、諭スニ丁寧誠實ノ言ヲ以テシテ、暫ク其勇氣ヲ儲ヘシメ、他日非常ノ變ニ用ヒ、其ヲシテ先鋒タラシメバ、堅ヲ衝キ銳ヲ挫クニ於テ、何ノ難キコトカアランヤ。誠ニ愛ムベキノ士也。然ルヲ幕府、意ヲ斯ニ不レ著、日夜猶其餘黨ヲ索ル。是

將軍拜廟

神州の汚穢  
を洒掃す

公武一和

三大臣の幽  
閉を免ず

惟ニ、怨ヲ天下ニ構ヘテ、事ニ於テ益ナク、其本ニ反ラズシテ、只ニ威力ヲ以テ制セントス。是ヲ捕レバ、殃又斯ニ生ジ、天下之變止ム時ナク、終ニ大變ヲ激生スルニ至ラン。是朕ガ深ク憂慮スル所也。聞、翌十六日、將軍拜廟ノ事アリ。有司前日ノ變ヲ以テ、拜廟ノ事ヲ延引セント謂ヘリ。然ルニ將軍、嘗テ拜廟ノコトヲ不レ廢シテ、之ヲ行ヘリト。朕、其寬量ヲ愛シ、因テ思フ。庚申三月以來、九門外ニ守兵ヲ置キ、又關白邸亭ニモ兵士ヲ置、或ハ參廟ニ密密武士ヲ具シテ、非常ニ備フト。是等、朕、深ク慙憂スル所也。因テ又思フニ、往年三社ニ奉幣セシ以來、神州ノ汚穢ヲ洒掃センコトヲ朝夕禱請シテ、又法樂ヲモ、至レ今猶之ヲ行フ。庶幾クハ、以テ前ノ志願ヲ全ウシテ、之ヲ終ント。志年云ヲ改メ天下ト與ニ更始ス。公主既ニ尙シ、公武實ニ一和ス。此時ニ迫ンデ、既往ハ咎メザルノ教ニ由リ、天下ニ大赦シ、三大臣ノ幽閉ヲ免ジ、列藩臣ノ禁錮ヲ赦シ、有志ノ士ノ連座セル者ヲ放ンコトヲ、速告幕府、以テ此舉ヲ行シメヨ。是朕所ニ深欲一也。爾後天下心ヲ合セ、力ヲ一ニシ、十年内ヲ限り、武備充實セシメ、斷然トシテ、夷虜ニ論スニ利害ヲ以テシ、一切ニ之ヲ謝絶シ、若不聽、速ニ膺懲之師ヲ舉、海内ノ全力ヲ以テ、入テハ守リ、出テハ制セバ、豈神州ノ元氣ヲ恢復センニ難キコト有ンヤ。若不然シテ、惟ニ因循姑息、舊套ニ從テ



印度の覆轍  
朕斷然とし  
て外夷を親  
征せむ

不改、海内疲弊ノ極、卒ニハ戎虜ノ術中ニ陥リ、坐シナガラ膝ヲ犬羊ニ屈シ、殷鑑  
不遠、印度ノ覆轍ヲ踏バ、朕、實ニ何カ先皇在天ノ神靈ニ謝センヤ。若幕府、十  
年内ヲ限りテ、朕ガ命ニ從ヒ、膺懲ノ師ヲ作サズンバ、朕、實ニ斷然トシテ、神武天  
皇神功皇后ノ遺蹤ニ則トリ、公卿百官ト、天下ノ牧伯ヲ帥キテ親征セントス。卿等、  
其斯意ヲ體シテ、以テ朕ニ報ゼンコトヲ計レ。

〔孝明天皇紀〕百三十一所收「忠香公手録」

第三三詔 藤原忠熙に萬機を關白せしめ給ふの詔（文久二年六月）

古に法り道  
を行ふ  
至治の政  
下に告げて、朕が意を知らしめよ。主者施行せよ。〔孝明天皇紀〕

第三四詔 藤原忠熙に隨身兵仗を賜ふの勅（文久二年六月）

良佐の臣  
今賢才の人を希みて、爰に良佐の臣を得たり。從一位藤原朝臣は、文質克く諧ひ、令

國の柱石

聞彌高、實に國の柱石にして、家の棟梁なり。仍りて左右近衛府生各一人、近  
衛各四人を賜ふ。以て隨身・兵仗と爲せ。將に兵仗を禁廷に連ね、式て芳榮を藤門  
に輝かさむ。主者施行せよ。〔孝明天皇紀〕

第三五詔 前内大臣藤原實萬に右大臣を追贈し給ふの宣命（文久二年八月）

天皇が詔旨らまると、故入道從一位藤原朝臣に詔りたまへと勅命を、聞食さへと宣りた  
まふ。食國の事無きを本として、人民の憂ふるを痛み、寤めても寐ても心を盡し、  
夙に夜に忠を致し思議奏し仕へ奉る。其の志常に厚く其の謀固より深し。寔に  
朕が良佐なりとうれし給ひよるこび給ひし間に、此の昭けき國を去り、彼の冥き國  
に罷りぬ。然して後、年を度り月を経たれども、悲しみ歎き漸漸に増し、軼感ますま  
す添ふ。今功勞を賞し、正直を著さむと所念行す。故れ是を以て、右大臣に上げ賜ひ  
贈り給ふ天皇が勅命を、聞食さへと宣る。〔孝明天皇紀〕

朕が良佐

第三六詔 昌仁親王を天台座主に任じ給ふの宣命（文久二年閏八月）

天皇が詔旨らまると、山中の法師等に白さへと宣りたまふ勅命を白さく。入道二品某親  
王（昌仁親王）は、顯密の奥旨を窮め、台家の清規に従へり。固より慈覺大師の門徒  
と爲て、其の職に在るべき隨に、又も往日の重職を授けて、天下泰平に公民和ぎ

顯密の奥旨  
を窮む